
天使に捧げる鎮魂歌（レクイエム）

若山 かおり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使に捧げる鎮魂歌レクイエム

【NZコード】

N1122Q

【作者名】

若山 かおり

【あらすじ】

交通事故に遭い、意識不明のまま目覚めない妻。うなだれる僕の前に自称『天使』が現れた。

天使は言う。

「もし、自分が死んでもいいというのなら、彼女を助けてあげることができるよ」

頷きかけた僕は、ふと昔の出来事を思い出す。

僕が出した答えは……。そして、天使の正体は？

(前書き)

この作品の投稿後、頂いた感想をもとに改稿した 改稿版 があります。

同じようで違う話になつております。
改稿したので、こちらは削除しようかとも思ったのですが、これはこれで一度書き上げたものなので、記念に残しておくことにしました。

「もし、自分が死んでもいいというのなら、彼女を助けてあげることができるよ」

目の前のそいつは、そう言った。

穏やかに晴れた、とある休日の午前中。溜まりまくった洗濯物を片付けた僕と彼女は、いつものように、いつものスーパーへ買い物へ出かけた。

レジ袋一つを一杯にして、僕たちは買い物を終えた。重たい方は僕が持ち、花かつおとポテトチップがメインの軽い方は彼女が持つ。建物の外へ出ると、あまりの太陽の眩しさに思わず目をつぶつた。そんな僕の隣で嬉しそうに彼女が言つ。

「ねえ、夏^{ナツ}、お天氣^{あめ}がいいから、遊歩道をお散歩して行こつ」

僕のレジ袋の内訳は、玉ねぎ、じゃがいも、ピーマン、レタス…。肉や魚は先週、買いだめしたので、既に家の冷凍庫に詰まっている。よつて今日の買い物に生鮮食料品は、なし。料理酒とサラダ油とシーチキンの缶詰が重たいけれど、このお口様を楽しまないのは、もつたいたい。

「うん、じゃあ、寄り道して行こうか」

僕たちは川沿いの遊歩道をのんびりと歩いた。川の中では鯉がのんびりと泳いでいる。

人通りはそれほど多くはないが、たまに僕たちのような買い物帰りの人や、赤ちゃんの日光浴らしきベビーカーのご婦人、元気に歩くご老人などとすれ違う。

やはり散歩中らしきおじいさんが、手に提げていた袋からパンを取り出した。それを千切つて川に投げる。鯉たちは今までのんびりしていたのが嘘のように、目の色を変えてパンくずに群がった。

「うわあ、すごいねえ」

大きな声で、彼女が何とも評価しかねる感想を漏らした。僕は

「そうだね」と相槌を打つ。

二人とも、そのまま何となく並んで鯉を見る。

「あれ、小さい魚もいるみたいだね」

鯉の迫力に負けて今まで気づかなかつたが、よく見ると川底に小さな黒い影が見えた。確か、この川にはオイカワやフナもいるらしい。けれど、僕はあまり目が良い方ではないので、よく分からない。だから彼女に訊いた。

「鯉以外に何かいる？」

彼女はしばらく目を凝らすようにじっと川底を見ていた。そして急に、にこりと笑つて言つた。

「アイ！」

「え？ 何？」

僕は彼女の言ったことが理解できなくて聞き返す。

「だから、あなたが『恋以外に何か要る？』って聞くから、私は『愛が要るよ』って答えたのっ！」

言つて、彼女は照れたようになつぽを向く。その仕草は少女のようだが、彼女は少女というほど若くない。何しろ結婚して五年になる僕の妻なのだから。

僕の名前は、かんばら神原夏樹。

彼女の名前は、かんぱり神原名月。

同じ名前である。

単なる偶然。それが縁で親しくなつたのも事実であるが。

結婚する前は良かつた。彼女は僕のことを『神原さん』と呼んでいたし、僕は彼女を旧姓の『星野』と呼んでいた。それが結婚して、同姓同名になつてしまつた。さすがに結婚してまで苗字で呼ぶのは何か変だ。かといって、彼女を自分と同じ名前で呼ぶのも、やはり変だ。それで、彼女は僕のことを夏ナツと呼び、僕は彼女を月ヅキと呼ぶことにした。

月は少々、子供っぽいところがある。僕より一歳年下だから、で

はなく、それが彼女の性格なのだろう。時々、困ってしまうこともあるが、いつまでも変わらなくあつて欲しいとも思う。

「あっ、にんじん、買い忘れたっ！」

月が叫ぶ。共働き夫婦なので休日の買い物は重要だ。買い忘れは痛い。

「ちょっと待つて。すぐ買つてくるからっ！」

彼女は自分が持っていたレジ袋を僕に押し付け、スーパーに向かつて逆戻りした。そんなに慌てなくても、と、ゆっくりと僕は後を追う。

その、僕の目の前で、事故は起きた。

スーパーの前の横断歩道。

右折してくる車に。

彼女は。

はねられた。

5

ぐつたりとした月を抱えながら、僕は何かを叫んでいたと思う。何がなんだか分からぬ。

近くにいた人が、すぐに救急車を呼んでくれたらしい。

彼女が担架で運ばれて、僕も飛び乗った、らしい。

もう、本当によく分からぬ。

気づいたら、彼女は病院のベッドの上に寝かされていて、僕は彼女のベッドに突っ伏していた。

彼女は目覚めない。

外傷はたいしたことがなかつたが、頭を強く打つたらしい。

あれから三日たつた。

けれど、彼女は目覚めない……。

「絶対、僕よりも先に死なないでくれよ」

結婚する前に、僕が彼女に言った言葉。

「そんなの、分からないわよ。先のことなんて知らないもんつ

むすつとした顔で答える彼女。

「君がいなくなつたら、僕はどうしたらいいか分からぬよ」

僕がそう言つた瞬間、彼女は顔を真っ赤にして僕の胸をぽかぽかと叩いた。曰く「あなたつて人は、なんて恥ずかしい台詞を平氣で言つのよつ！？」だそうで。「嬉しいぢやないのつ」と呴きながら、「こんな顔をあなたに見られたくないつ」と顔を隠す　僕の胸に自分の顔を押し付けるという行為によつて。

彼女はしばらく僕の胸の中で喚いたあと、自分の顔をぱちん、と叩いた。何事もなかつたかのように僕から離れて、それでも明らかに作つたと分かる眞面目な顔で言つ。

「じゃあ、あなたが先に死んだ場合、残された私はどうしたらいいの？」

「僕が死んだ後ることは分からぬよ。君の自由でいいよ」

「冷たい人ね。だつたら私が先に死ぬもんつ」

「それは駄目だ。僕が先だ」

「いいえ！　私つ

しばらく不毛な言い争いを続けた末、諦めたように彼女が言つた。「仕方ないわね。私の方が二歳年下だから、あなたが死んだきつかり二年後に死ぬわ。これでいい？」

珍しく彼女が折れた。意地つ張りで子供っぽい彼女が折れた。だから、充分に長生きしてね。そう言つて、彼女は抱きついてきた。

なのに、先に逝つてしまふのか……？

「ちょっと、いいかな？」

突然、背後から声がかかつた。子供の声といつには大人びているが、少年とも少女とも判断しかねる高い声だ。

僕はどきりとした。ここは病院の個室で、僕と月しかいなくて、ドアは閉まつていて、ドアが開いた音は聞いていなくて　だから、僕の後ろに人がいるはずはないのだ。

僕は恐る恐る、振り向いた。

そこに、そいつはいた。全身にシーツのよつうな白い布を巻きつけた、少年のような少女のような性別不明の顔立ちの。

「もし、自分が死んでもいいというのなら、彼女を助けてあげることができるよ」

月の前のそいつは、そう言った。

「君は誰だ？ どうやってこの部屋に入ってきた？」

動搖していたわりには、よくまともなことが言えたと思う。月が目覚めない。その非常事態が、僕をこの非現実的な状況に順応させてしまったのかもしれない。

薄暗くなり始めた日の光を頼りに、そいつの姿を精察する。月の悪い僕は電灯の助けを借りたいところだけれど、スイッチは入り口の傍で、ちょうどそいつの後ろにある。

そいつは白いリノリウムの床にすくと立っていた。服装は白ずくめ。ただ、光度が足りないから青白く見える。そいつの周りは、まるで色のない世界のようだ。背はあまり高くなく、顔立ちはどこか幼い。

そいつは自分に注意が向いたことが嬉しかったのか、にやつと笑つた。

「俺は神様の下働きだつ。つてことは、俺は『天使』かつー？」
自分で突っ込みを入れる自称天使。一人称は『俺』だが、『彼』だか『彼女』だか分からぬ。天使に性別を求めてはいけないのかかもしれない。そいつが天使だというなら。

「彼女を助けられるつて、どういうことだ？」

僕は天使に問いかける。問いかけるというより、詰問といった方が正しいだろう。僕が話に乗ってきたので、天使がにこにこしながら寄ってきた。僕が座っているのと同じ丸椅子を月が寝ているベッドの下から引きずり出して、僕の隣に並べて座る。天使というのに黒髪で、部屋が暗いからはつきり分からぬけれど、たぶん目も黒っぽい色で、天使の翼らしきものも天使の輪らしきものも見当たら

ない。

「神様のところには、死ぬ人間の名前が書かれた名簿があるんだよ。で、その名簿は名前がカタカナで書いてあるんだ」

天使はくりくりとした目でじっと僕を見る。もう分かるだろ、と目が言っている。

「彼女の名前は『カンバラナツキ』。そして、あなたの名前は

「『カンバラナツキ』だ」

僕が答える。僕と月は同じ名前だ。

「だから、彼女じゃなくて、あなたが死ぬんでもいい。名簿上は問題ないよ」

天使はにっこりと笑う。

僕が死ねば、月は助かる？　こいつに頼めばそれが可能？
こいつは天使ではなくて、悪魔というのではないだろうか。
けれど、月が助かるなら、僕は……。

僕が死ぬ。

僕は、終わる。

鼓動が、止まる。

動かない、心臓。

フランシュバック　。

「心臓がぴくぴくしていてね。もう、可愛くって！」

そのとき月は妊娠していた。

超音波検査で初めて心拍が確認された日のことだ。検診の様子を彼女は事細かに教えてくれた。それから、「次の検診は絶対一緒に行ってね。一緒に見てね」と言った。

その検診の日、無理して年休を取つて彼女と一緒に産婦人科の門をくぐった。ものすごく恥ずかしかったけれど、行ってみれば同じような顔をした田那さんが結構いて、ほつとした。

そして、超音波検査を見た。

医者に説明されなければ、何が映っているのか分からぬ画面を見た。

その中央で、ぴくぴくしているはずの、心臓。

けれど、画面の中で動いているものは、何もなかつた。

「残念ですが……稽留流産です」

医者が言つ。

「この子は、どうなるんですか？」

乾いた声で僕が言う。心臓が動いていないのだ。どうなるも、何も、ない。けれど、理解できなかつた。入院すればよくなるのかも、なんてことすら思つた。

「誰も何も悪くなくても、妊娠初期では十五パーセントの人が流産します」

僕の頭は麻痺していて、医者の言つていることはまともに聞こえていなかつた。「あんた、医者だろ？、何とかしてくれよ」そんな、すごくありがちなことを言つた気がする。

服を引っ張られる感覚がしてその方向を見ると、月^{つき}が僕のシャツの裾を握つていた。彼女はただ涙を流していて、ただただ涙が流れ続けていて　僕は彼女を抱きしめた。

「私が悪かつたの。私が体に悪いものを食べていたから、規則正しい生活を送つていなかつたから」

「違う。君は悪くない。だつて、どうしようもなかつたんだ」

僕たちは抱き合つて眠つた。月^{つき}は、眠つている間に僕がいなくなつてしまつことを恐れるかのように、決して僕を放さなかつた。

一月経つて、月^{つき}は職場に復帰した。僕たちは社会人で、僕はもともと年休以上に休めないし、彼女だつていつまでも悲しんでいいられない。

あるとき、月^{つき}は僕に言った。

「あなたが死んだ一年後に私が死ぬ、つていう約束。あれ、撤回する。私、誰かに先に死なれて取り残されるの、もう嫌」
僕は何も答えられなかつた。

僕が死ぬ。

僕は、終わる。

鼓動が、止まる。

動かない、心臓。

残された彼女は、どうなる？

「さて、どうしたい？」『カンバラナツキ』さん。あなたが死ぬのと彼女が死ぬのと、どっちを選ぶ？」

天使の声に現実に引き戻された。いや、これは本当に現実なんだろうか？ 僕の目の前には眠つたままの月^{ヅキ}がいる。青白い顔で瞳を閉じている。そんなの嘘だ。彼女は歳不相応なくらいに元気なんだ。時にはこっちが恥ずかしくなつたり、慌てたりするほど子供っぽかつたりして僕を困らせる。僕にとって、いるのが当たり前で、いくつてはいけない存在なんだ。

「……選べないよ

無理やり言葉を吐き出した。

「嫌だよ。残すのも、残されるのも」

まるで子供のわがままだ。でも、これが本心だ。天使はそんな僕を笑うわけではなく、じつと見つめている。僕は俯いていたけれど、僕より背の低い天使からは僕の表情は丸見えだ。

「僕たちは　僕と月^{ヅキ}は、一度、取り残された。……僕たちには子供がいた。生まれなかつた子供がいた。僕たちは残されて、とても辛かつたんだ」

辛かつた。どうしようもなく辛くて悲しかつた。

「……そうやって、親を悲しませて先に死んだ子供がどうなるか、知つていいる？」

透明な、感情の読めない声で天使が言った。この天使が初めて天使らしく見えた。僕は戸惑う。天使は僕に答えを求めているわけではないらしく、静かに言を継ぐ。

「『逆縁の罪』といって、死ぬことも赦されず、神様の下働きになるんだよ」

逆縁とは仏教で、神様とか天使というのはキリスト教じゃなかつたっけ？

僕の疑念の眼差しに、天使は慌てて取り繕う。

「ま、ともかくつ。あなたは自分が死ぬのも彼女が死ぬのも嫌だ、というわけだね？」

「そうだ」

きつぱりと言い放つ。

天使は 天使は、にやあつと笑つた。いたずらがうまくいった子供のように。

「よつしゃあつ！ 大成功つ。俺はその言葉を聴きたかつたんだつ！」

椅子から飛び下りてガツツポーズを取る天使。

「え？」

呆然とする僕に、天使はかしこまつたように、こほん、と咳払いをする。

「えーと、どういうわけか運のいいことに、ここに『カンバラナツキ』がもう一人います。というわけで、この『カンバラナツキ』に死んでもらうことにして、彼女には生き返つてもらいましょー！」

「ここに？ もう一人？」

「うん、ここに」

天使は自分を指す。

「君は？」

「『カンバラナツキ』」

僕は息を呑む。自称天使の正体が分かつた。

「『この子の名前、どうじょうか？』」

あの頃、まだあの子が月のお腹にいた頃のこと。彼女が僕に訊いた。

「え？ まだ性別、分かつてないんだよね？」

「でも、『この子』じゃ可哀相だから、といあえずの名前」

しばし、僕は考える。

「……じゃあ、『ナツキ』」

「それじゃあ、私たちと一緒にじゃない」

「いいだろ？ 君が月で、僕が夏。そして、この子がナツキ」

「君は、『ナツキ』なんだね」

「だから、そう言つているじゃん」

ちょっと生意気なふくれつ面。僕は思わず、天使を ナツキを抱きしめようとして、逃げられた。

「駄目だよ。俺はこの世界の存在じゃないから、触づけや駄目っ」

べーっと舌を出すナツキ。

よく聞けば、喋り方が月にそっくりだ。顔は、ひょっとして、なんとなく僕に似ている、かもしねない。

「それじゃ、そろそろ行くね。これで俺はちゃんと死ねるから」

「ええと、君は既に、その……死んでいる、はず……」

「だから言つたる。神様の下で死ぬことも赦されず下働きをしてい

る、って」

どうこう理屈なんだらう。よく分からない。

けれど、どうやらこれで本当にお別れらしい。

僕たちが逢えるのを楽しみにしていたナツキ。喪われてしまったナツキ。そのナツキが今、目の前にいる。ここに留まることは無理でも、その姿をせて一日、月に見せてあげたい。しかし、どうやらそれは叶わないようだ。

「あと、そいつっ！」

ナツキはぴしゃり、とベッドに横たわったままぴくつともしない月

を指さす。

「俺の妹には『なつき』なんて名前、付けるなよ。やせこじくて仕方ないから」

ナツキは虚空を見つめ、少しだけ考えるポーズをする。それから、にやっと笑った。

「うん、俺が名前をつけてやるー。そいつは『愛』だつー。」「え……？」

「妊娠五週目。もうちゅうとしたら、ゲロゲロ吐くから、氣をつけやつてな」

僕は驚いて彼女のお腹の辺りを見た。

そして、はつと気づいたときには、もうナツキはいなかつた。

「あなた、ねえ、あなた……。もう、夏！」

揺すぶられて目を開けた。目の前はとても眩しく、真っ白だった。目をこすりながら体を起こすと、初めに視界に入ってきた白いものは白い掛け布団カバーだったということが分かる。それにしても眩しいのは、明るい太陽の光のせいだ。すっかり朝になつている。

そして、彼女の姿を捉えたとき、眠気はいつぺんに吹き飛んだ。

「月！」

月が目覚めた。僕のことを見つめている。彼女は、彼女の足に頭を乗せて寝ていた僕にちょっと不満顔だ。すっかり痺れてしまつて足の感覚がない、と文句を言つ。けど、それが何だ！ 僕なんかこの三日間、ほとんど寝ていなかつたんだ！

僕は彼女を抱きしめて、頬を擦り寄せる。

「ちよつ……。ちよつと、夏！ 髭が痛いわよー！」

髭なんて、この三日、伸ばしっぱなしだ。

きつくきつく、彼女を抱きしめる。痛いだの、苦しいだの、そんな言葉は耳からすり抜けていく。そう言つている彼女だって、僕のことを強く抱きしめているのだ。

月を抱きしめたまま、僕は言った。

「……ナツキに逢つたよ」

この『ナツキ』が誰を指すのか、言わなくても彼女にはすぐ分かつた。なぜなら彼女はこう答えたから。

「うん、私も。『愛が在るよ』って

「……もともと死ぬ予定もない者を、名簿だなんて虚偽をぬかして惑わしあつて」

神様はどうやらお怒りらしい。ナツキはぺろつと舌を出した。

「だってあの一人、このままじゃ俺のこと忘れないでしょ？ それじゃ、これから生まれてくる妹が可哀相じやん

「なんじゃ、てっきり妹に生まれ変わりたいとでも言つと思つたが

……」

「なあに言つてんのつ！ 僕は僕。妹は妹。生まれ変わりたくないんじゃない。俺はちゃんと俺として愛されていたからいいの」

神様相手に傍若無人に言い放つ。けれど、瞳の奥が揺れている。

ナツキは小さな声で呟いた。自信なさげに。

「俺さ、親孝行できたかな？ 今まで悲しませるばかりで、何もできなかつたけど、何か、できたかな？」

ナツキは鼻がつんと痛くなつて、喉がかつと熱くなるのを感じた。目から落し物をしないように、瞼を閉じる。

神様は苦笑した。そして、言った。

「お前の両親を想う気持ちに免じて、逆縁の罪を赦そう。 幸せにおなり」

ナツキの体は溶けて、解けて、光になつた……。

(後書き)

ものす「」べ悩みました。内容も、文章も。自分の中にあるイメージを巧く表現できず、文章力のなさ、構成力のなさに泣かされました。

この想いをどう書いたらいいんだろう……。と。

「」まで読んでくださってありがとうございます。更に感想などいただけたら、床に転げまわって喜びます。よろしくお願ひいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1122q/>

天使に捧げる鎮魂歌（レクイエム）

2011年7月23日03時27分発行